

## 授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察

### Raising Teachers' Japanese-speaking Ability to Encourage Students' Understanding in Class

平 田 祐 子  
Yuko Hirata

#### (要約)

大学全入時代を迎えようとしている昨今、学生の学力や学習意欲の低下が問題になるなかで教育の標準化が必要となっている。そこで、中部地区の短期大学生と教員を対象にアンケート調査を実施して、「学生が求める理想の授業」と「教員が理想と考える授業」の差異を抽出した。到達点は学生の理解を深める教授法を完成させることであるが、第一段階として調査結果の中から「国語」に関する項目をもとに今後の授業における国語教育の在り方について考えていく。

#### (キーワード)

国語教育、Faculty Development、コミュニケーションスキル

#### はじめに

大学設置基準の改正により従来の研究機関としての大学から教育機関としての大学へと変貌しているなか、教育のQC (Quality Control) のための標準化が必要となってきた。 Semester制、シラバスの作成、学生による授業評価、単位制度の徹底、第三者評価の導入などが強いられるようになったが、第三者評価でも授業評価に関して授業内での学生の意欲を喚起する工夫や担当教員の授業改善への意欲や理解度レベルに対応した学習支援という教員の教育能力の開発が課題となっている。また、大学は大衆化され、18歳人口の減少による大学全入時代を目前に控えて、教育現場では様々な問題が生じている。受講者である学生は、社会動向の変化により興味や関心が多様化、学習意欲や理解度の低下、格差の拡大などにより、かつての大学生像から変容しており、単一的な授業展開では学生の満足を得ることが難しくなっている。

このような社会背景から、現状の学生に対応した教育をもたらすための教授方法の開発が緊要な課題と考えられる。学生と教員の意識調査から今後の国語教育の在り方を論ずる。また、本稿は「FD (Faculty Development) に関する研究」[平成18・19年度、日本ビジネス実務学会 (中部ブロック) 助成研究]<sup>1)</sup>に関連したものであり、今回は国語能力に関する項目を分析していく。

#### 1. 先行研究と本研究の目的

Faculty Development (以下、FDと略す) の概念は多義に亘るが、広義のFDは「究極的には学生の学習の質的改善を目的として企画された広範囲の活動をさす」、狭義のFDは「教授団メンバーが教師および学者として自己の能力の改善を支援することを目的とした試み」<sup>2)</sup>と定義されている。‘faculty’

の第一義は「能力・才能」であるが、1960年代後半からアメリカの大学でFD活動がはじまり、そのなかで‘faculty’は「専門職の同業者団体」<sup>3</sup> という意味合いで用いられるようになった。FD活動を遡ると、1970年代のアメリカに辿りつく。当時の社会背景は第2次世界大戦後に拡大した高等教育が転変して学生数が減少して学生の質的低下や多様性、また、教員ポストの減少という大学を取り巻く社会環境の急速な変化がもたらしたものであった<sup>4</sup>。これは全入時代を迎えようとしている現在の日本の大学や学生の状況にも似ている。日本では、1990年以降、FD制度が導入されはじめ<sup>5</sup>、1998年の大学審議会答申<sup>6</sup> から具体的な制度が確立したものと考えられる。大学審議会答申（1998.10.26）では、21世紀の日本の社会状況や高等教育における基本理念や大学の個性化を目指すための改革方策が示され、FD実施の義務化が提案されている。それ以降、現在では大学における教育の質向上のためのFD活動が実施されるようになったのである。

FDの種類に関しては大別すると、①教員開発（Faculty Development, FD）、②授業開発（Instructional Development, ID）、③カリキュラム開発（Curriculum Development, CD）、④組織開発（Organizational Development, OD）（以下、略字で記す）であるが、「4種のアプローチを含むプログラムを企画・実施することが教授・学習の改善の新しい方式」<sup>7</sup> であり、現状では上記のものを少しずつ改善していくことが急務と考えられている。

本稿では、FD研究課題の中から中部ブロック助成研究（平成18・19年度継続）を受けて中部地区の学生・教員を対象に行なったアンケートの結果をもとに、IDについて詳述する。IDはFDと重複するところが多く、IDは教員の能力それ自体よりも指導的側面（学生の学習の促進、教材の準備など）に力点が置かれる<sup>8</sup>。IDに関する先行研究は、太田（2007）が授業評価後の数値をもとにCDやIDに触れ、特に「学生に人気の高い授業の分析」をビデオ撮影集録したものを参考に分析している<sup>9</sup>。藪下（2007）は、現代GP取得時のCDに関するカリキュラム紹介や授業の相互参観、VTRの撮影による授業参観、他学科の実習見学などをした後の具体的な授業内容改善について述べている<sup>10</sup>。本稿では、「現在の学生が望む授業と教員像の調査」「教員の教育に対する取り組みの実態と意識の調査」を行ない、その結果を受けて国語に関する項目を抽出する。学生と教員の意識の差異を検討しながら、今後の教育に反映させたい。

## 2. 本研究の方法

### 2. 1 学生および教員のアンケート調査と分析

授業では教員と学生との相互理解が必須である。しかしながら、教室という箱の中で行なわれるコミュニケーションの送り手である教員が理想とする授業、受け手であり受講者である学生が理想とする授業には差異が生じてくる。それは、学生と教員との年代の相違、両者が考えている内容の難易度の相違、受講者である学生達の学力差などである。教員自身の基本的な教授能力に言及される場合もあるが、この差異を認識することは教授法を考える上で重要なことであるため、本研究では、両者の一致点と相違点、改善できる点、改善しなければならない点などについて調査・分析する。その中でも、本稿では「国語に関する項目」を抽出して、両者の差異を改善していく方法を考える。

## 授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察

## 2. 2 調査概要

## 1) 目的

学生と教員の理想とする授業の相違点を抽出すること。

## 2) 対象者

・学生1,482名（学生の協力校は下記の12校）

（愛知県）愛知学泉短期大学・愛知江南短期大学・一宮女子短期大学・岡崎女子短期大学・  
名古屋経営短期大学・名古屋経済大学短期大学部・名古屋女子大学短期大学部・  
名古屋文化短期大学・名古屋短期大学

（岐阜県）中部学院大学短期大学部 （三重県）高田短期大学

（石川県）金城大学短期大学部

・教員24名（ビジネス実務学会中部ブロック会員に依頼）

## 3) 調査時期

学生アンケート依頼期間：研究メンバー担当校（平成18年7月初旬～夏休み前まで）

その他の依頼校（平成18年9月初旬～11月初旬）

学生アンケート依頼方法：研究メンバー担当校は最終授業終了後に説明して質問紙調査を無記名で実施した。その他の依頼校へはビジネス実務学会員に送付して授業終了後に説明して質問紙調査を無記名で実施した。

教員アンケート依頼期間：平成18年8月30日～平成18年10月下旬

教員アンケート依頼方法：ビジネス実務学会員に送付して依頼。質問紙調査を無記名で実施した。

## 4) 調査内容

①アンケート項目数：89項目。

②項目分別：項目決定については、事前に研究メンバーが、各担当の学生たちに自由記述アンケートをとり、すべての中から共通項目を選択した。

選択式（学生／教員とも）

- ・授業方法・工夫に関する項目（37）
- ・学生への対応に関する項目（13）
- ・教員の資質に関する項目（25）
- ・授業環境に関する項目（14）

記述式：・講義内容について（教科書・副教材・シラバスなど）

- ・授業実施について（ツールについて・スキルについて）
- ・授業を行う上での自己資質向上について
- ・その他

表1：学生用アンケート（選択式）（\* 教員用も内容は同様で表現のみ変えている）

「★こんな先生のこんな授業を望んでいる★（こんな先生のこんな授業がいい!）アンケート」 無学年（男性・女性） 無年齢 第 1/3

このアンケートはビジネス実務科における教壇での研究の一環として、よりよい授業を構築することを目的に行います。無学年にて行われ、結果はそのままビジネス実務科で発表されます。あなたの希望と一致するものに○をお付け下さい。ご協力をお願いします。不満足はご自身の先生にお知らせ下さい。

教員について（希望するものに○をつけて下さい）

1) 声の大きさ	2) 話すスピード	3) 声の高低	4) 声の強さ	5) ビジネスマナー	6) 授業内容の面白さ	7) 難しい言葉	8) わかりやすい言葉	9) 授業中の質問	10) 丁寧な言葉	11) 友達同士のような授業	12) 授業を盛り上げる工夫	13) 資料や教材の活用	14) 最新の資料の活用	15) ビデオ・映像の活用	16) パワーポイント・Webサイトの活用
17) 資料を早くして読解	18) 授業中に質問	19) 学生が授業のペースを多く	20) 授業に教員が参加する	21) グループでの話し合いを入れる	22) グループ活動が多い	23) 授業の進め方が面白い	24) 授業の進め方が面白くない	25) 授業の進め方が面白くない	26) 授業の進め方が面白くない	27) 授業の進め方が面白くない	28) 授業の進め方が面白くない	29) 授業の進め方が面白くない	30) 授業の進め方が面白くない	31) 授業の進め方が面白くない	32) 授業の進め方が面白くない

2/3

35) 出席率を重視する授業内容	36) 授業内容を重視する授業内容	37) 授業内容を重視する授業内容	38) 授業内容を重視する授業内容	39) 授業内容を重視する授業内容	40) 授業内容を重視する授業内容	41) 授業内容を重視する授業内容	42) 授業内容を重視する授業内容	43) 授業内容を重視する授業内容	44) 授業内容を重視する授業内容	45) 授業内容を重視する授業内容	46) 授業内容を重視する授業内容	47) 授業内容を重視する授業内容	48) 授業内容を重視する授業内容	49) 授業内容を重視する授業内容	50) 授業内容を重視する授業内容
51) 授業内容を重視する授業内容	52) 授業内容を重視する授業内容	53) 授業内容を重視する授業内容	54) 授業内容を重視する授業内容	55) 授業内容を重視する授業内容	56) 授業内容を重視する授業内容	57) 授業内容を重視する授業内容	58) 授業内容を重視する授業内容	59) 授業内容を重視する授業内容	60) 授業内容を重視する授業内容	61) 授業内容を重視する授業内容	62) 授業内容を重視する授業内容	63) 授業内容を重視する授業内容	64) 授業内容を重視する授業内容	65) 授業内容を重視する授業内容	66) 授業内容を重視する授業内容

表2：教員用アンケート（記述式）

本調査は匿名化し、データに個人情報は含まれません。 (匿名化・個人情報は含まれません)

1. 授業内容について（教員側・教員側・シラバスなど）

2. 授業実施について

3. 先生方について

4. 授業を行うまでの自己責任範囲について

5. その他

## 授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察

## 2. 3 調査結果

集計結果をもとに、学生と教員の理想とする教員像のアンケート結果の中から両者の相違点を見出すために差異抽出グラフを作成した。学生と教員の選択式質問内容は同一に設定しており、内容を大別すると次のようになる。「授業方法・工夫に関する項目（37項目）」「学生への対応に関する項目（13項目）」「教員の資質に関する項目（25項目）」「授業環境に関する項目（14項目）」である。その中の「授業方法・工夫に関する項目（37項目）」中の12項目が教員の国語能力に関する事項である。教員の話し方は問1～6で、「音声言語」に関しては問1～4で質問、「非言語表現」に関しては問5～6で質問した。言葉遣いに関する事項（言語表現）は問7～12で質問した。調査結果を下記の表に示す。

1. 声の大きさ
2. 話すスピード
3. 声の高さ
4. 声の調子
5. ジェスチャーを導入する
6. マイクを使う
7. 難しい言葉を使用する
8. わかりやすい言葉で話す
9. 熟語や専門用語を使う
10. 丁寧な言葉遣いをする
11. 友達同士のような言葉遣いをする
12. 説明を繰り返す度合い

表3：学生アンケート集計結果

学校名 総人数 明記してください						合計
	1	2	3	4	5	
1 声の大きさ	3	17	691	466	81	1258
2 話すスピード	1	170	957	114	16	1258
3 声の高さ	2	51	1067	124	9	1253
4 声の調子	1	10	676	471	94	1252
5 ジェスチャー	36	103	559	415	138	1251
6 マイクを使う	185	760	300	2	5	1252
7 難しいことば	228	398	498	121	13	1258
8 わかりやすい言葉	3	22	273	460	497	1255
9 熟語や専門用語	95	256	609	246	51	1257
10 丁寧な言葉	13	74	504	413	254	1258
11 友達同士のような言葉	131	235	500	284	106	1256
12 説明を繰り返す回数	75	864	287	23	7	1256

表4：教員アンケート集計結果

学校名 総人数 明記してください						合計
	1	2	3	4	5	
1 声の大きさ	12	15	11	7	10	55
2 話すスピード	12	9	11	5	10	47
3 声の高さ	9	9	9	4	6	0
4 声の調子	10	11	10	7	9	0
5 ジェスチャー	10	10	11	5	7	43
6 マイクを使う	6	4	8	3	6	27
7 難しいことば	5	9	11	4	5	70
8 わかりやすい言葉	12	13	13	10	14	62
9 熟語や専門用語	10	10	11	3	11	45
10 丁寧な言葉	11	12	13	6	9	107
11 友達同士のような言葉	8	4	8	3	9	32
12 説明を繰り返す回数	7	7	8	4	7	33

## 3. 調査結果の分析

教員に課せられた役目は種々存在するが、教員の国語能力に関する調査結果のなかで、「言語表現」に関する質問項目に学生と教員の意識の差異が見られた。言葉に関する質問は問7から問9である。問7の「教員が授業中に難しい言葉を使用しているか否か」という質問に関する教員の結果は「あまり使わない」に数値が偏っているが、学生は「少々使う」の数値が最も多い。問7に対比させた質問として、問8の「教員がわかりやすい言葉を使用しているか否か」についても教員は「よく使う」に数値が集中しており、わかりやすい言葉を使用するように意識しているようだが、学生は「少々使う」から「よく使う」へと数値の広がりが見られる。

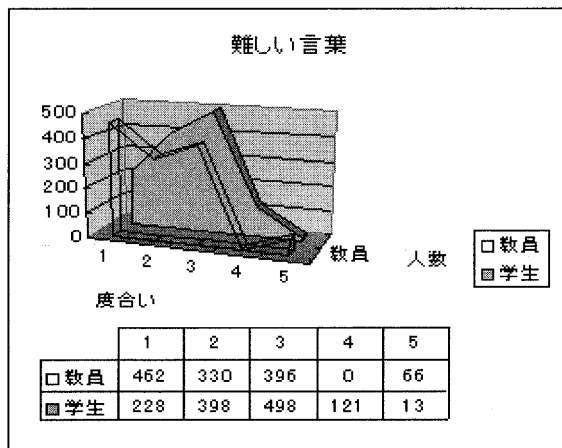


図1：難しい言葉の使用

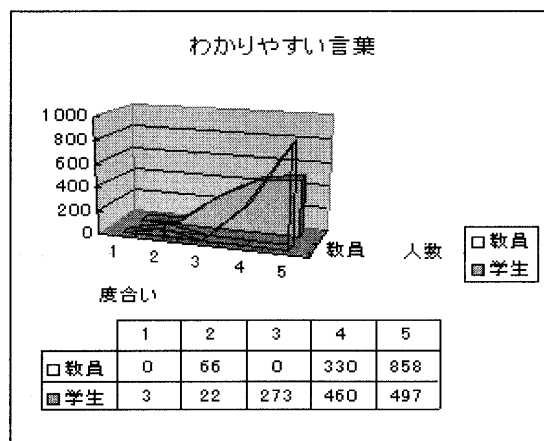


図2：わかりやすい言葉の使用

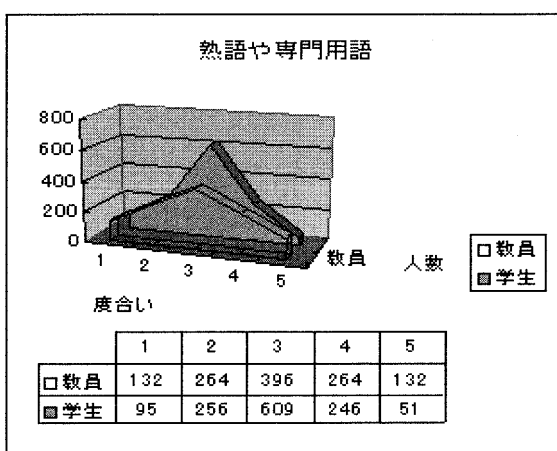


図3：熟語や専門用語の使用

また、問9の「教員が熟語や専門用語を使用しているか」に関しては、教員の専門性の問題があるためか「あまり使わない」から「よく使う」までの5つの選択項目へと数値の広がりが見られる。多数の「熟語や専門用語」「難しい言葉」の使用は、学生が教員は授業中に難しい言葉や熟語や専門用語を使用していると感じている。

問10と問11が言葉遣いに関する事項で、問10の「丁寧な言葉遣い」は学生も教員もほぼ同一の感覚で、学生は教員が丁寧な言葉遣いを「少々使う」

「やや使う」と思っており、教員も「やや使う」と答えている。「よく使う」と感じる数値もほぼ同じであった。問11の「教員が学生に友達同士のような言葉遣いをするか否か」に関する事項の数値差は大きく、図5のグラフからも差異が読み取れるが、教員は「あまり使わない」に数値が集中している。しかし、学生は「少々使う・やや使う」ほうが理想的だと感じており、教員に友達のような接し方を望んでいることが推定される。

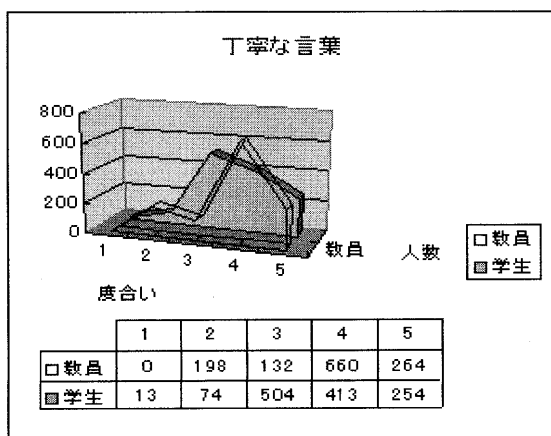


図4：丁寧な言葉の使用

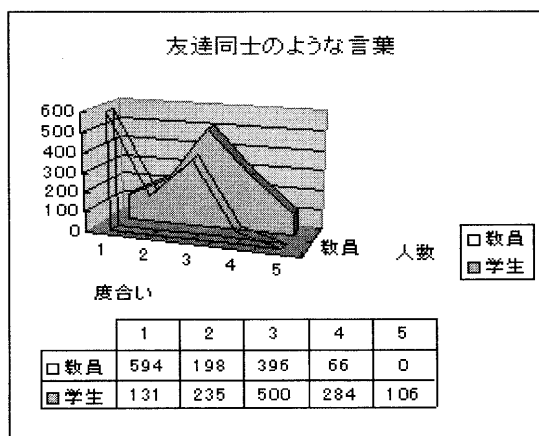


図5：友達同士のような言葉の使用

## 授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察

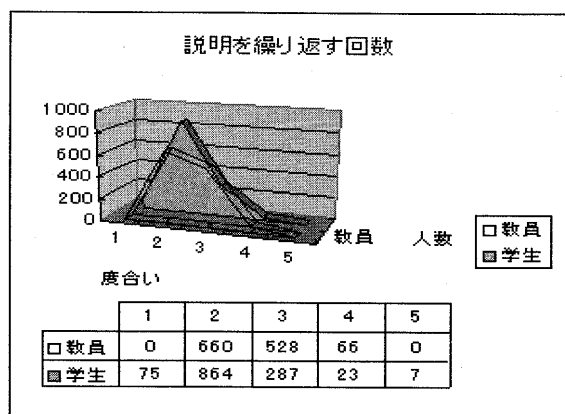


図6：説明を繰り返す回数

問12の「説明を繰り返す回数」は学生も教員も「2回繰り返す」の数値が最も高いが、教員は「3回繰り返す」の数値も高く、42%の教員は繰り返す回数が3回必要だと考えている。問5では「ジェスチャーを導入したほうがいいのか否か」という「非言語表現」に関する質問をした。両者の結果はグラフから読み取れるように、学生は山型を示しており教員はM字型を表している。学生はジェスチャーを「少々使う・やや使う」に数値が集中していて「あまり使わない」ことは理想と考えていないようである。

それに反して、教員は「よく使う」の数値も多いが、「あまり使わない」の数値も多い。問6の「マイク使用」に関しては、「学生数に対し適度な広さの教室に対して」という但し書きを付記した。選択番号1を「使わない」、2を「必要なときだけ使う」、3を「使う」と選択肢を3つにした。両者とも「必要なときだけ使う」ことが好ましいとしているが、次に高い数値は学生が「使う」、それに反して教員は「使わない」へと数値の偏りがある。これは、問1の「声の大きさ」にも関連するが、教員は「大きい声」が理想だと考えているが、学生は「普通の大きさ」を理想と考えていることとも共通点を見出すことができる。学生は、教員が必要なときだけマイクを使用して、大声を無理に出すよりも日常的で自然な話し方で授業を進めることを理想としていることが読み取れる。

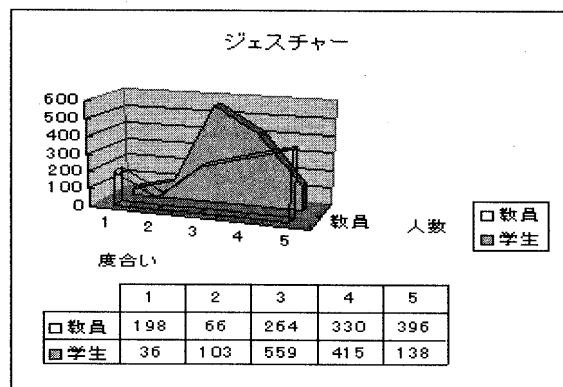


図7：ジェスチャー導入に関して

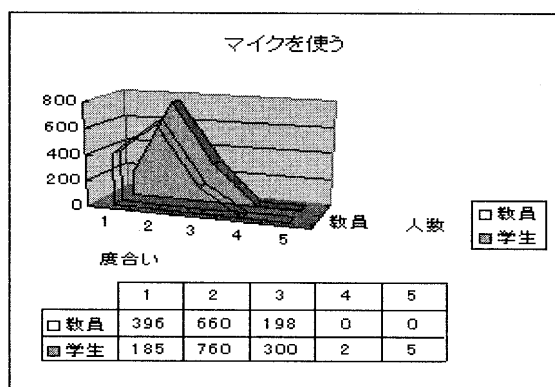


図8：マイク使用に関して

「音声言語」に関しては両者の主観的なものにより数値が左右されるが、本調査においては教室環境が回答者の所属大学により異なるため、具体的な数値を示して質問するのではなく回答者が普段の授業で感じていることに対する質問をした。問1の「声の大きさ」は教員が「やや大きい・大きい」声を理想と考えているが、学生は「普通の大きさ」に数値が集中している。問2の「話すスピード」は学生が「普通の速さ」を理想としているが、教員は「やや速く」話している。問3の「声の高さ」に関しては両者とも「普通の高さ」を理想としている。問4の「声の調子」も教員は「普通の調子・やや明るい・明るい」ことを理想としているが、学生は「普通の調子」を理想としていて、普段と変わらない声の大きさ、速度、声の高さや調子で自然体の「音声言語」で教員が授業を進めることを望んでいることが確認できた。

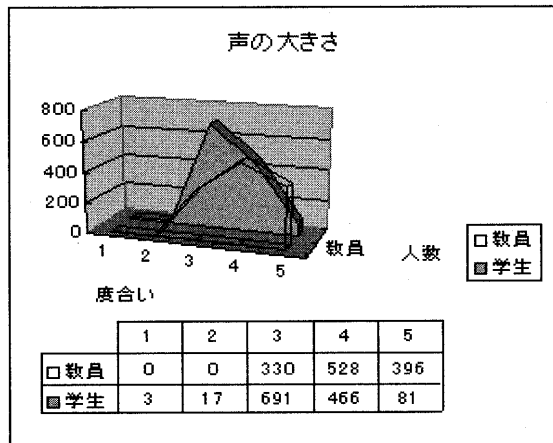
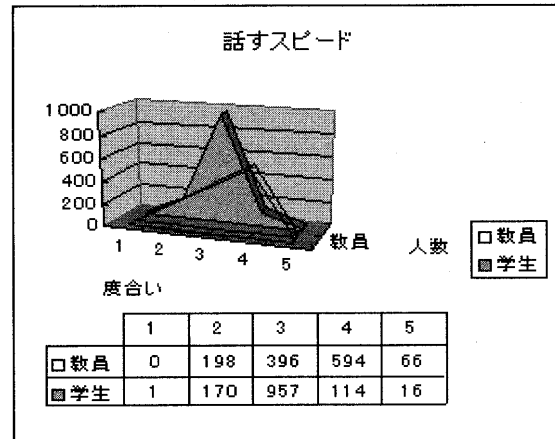
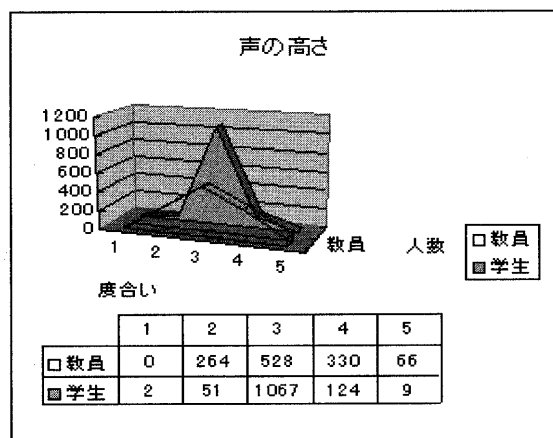


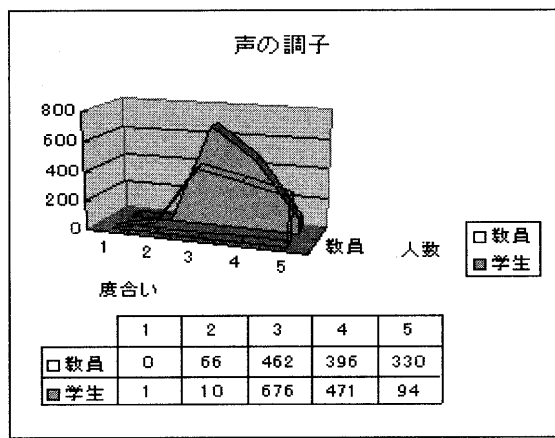
図9：教員の声の大きさ



10：教員の話すスピードに関して



11：声の高さに関して



12：声の調子に関して

## おわりに

以上のように日本におけるFDの歴史の変遷や種類を確認した上で、①現在の学生が望む授業と教員像の調査②教員の教育に対する取り組みの実態と意識の調査を行ない、その結果を受けて、国語に関する項目を抽出して学生と教員の意識の差異を検討しながら教員の理想的な話し方や言葉遣いに関して鑑みた。言葉遣いに関しては、教員が授業中に難しい言葉を用い、熟語や専門用語を多く使用していると学生は感じている。また、教員が友達のような話し方で接することを理想だと考えている。「声の大きさ」にも関連するが、教員は「大きい声」が理想だと考えているが、学生は「普通の大きさ」が理想と考えている。学生は、教員が必要なときだけマイクを使用して、大声を無理に出すよりも日常的で自然な話し方を理想としていることが読み取れた。

今後も学生アンケートのデータおよび教員アンケートの参考資料を分析して検討しつつ学生の現況および社会のニーズに対応できる教員の資質・能力向上と授業方法を提供するための研究を続けていく。なお、本研究は、学生のアンケート回答（学生の望むもの）に迎合して、教員の考え方や教授方法を改善するものではなく、現状認識の上で両者の質的向上を目指すものであることを加筆しておく。今後の課題としては、従来の研究機関としての大学から教育機関としての大学へと変貌しているなかでの教育のQC確立に役立つ授業を反省的実践などの手法を用いて作り出し、更にIDからCDへと移行していく所存である。



## 授業内容を充実させるための国語能力に関する一考察

## 註

- 1 平成18・19年度に日本ビジネス実務学会（中部ブロック）の研究助成を受けて「FDに関する研究」をしている。研究会メンバーは、川口 直子（愛知学泉短期大学）・水口美知子（名古屋経済大学短期大学部）・河野篤（中部学院大学）・寺島 雅隆（名古屋文化短期大学）と筆者である。
- 2 関正夫「大学教育改革の方法に関する研究—Faculty Developmentの観点から—」広島大学教育研究センター 4—5（1989）
- 3 English-Japanese Dictionary For The General Reader（リーダーズ英和辞典）研究社（1984）には、第2義に「a《大学の》学部、学部の教授団〔構成員〕；《大学・高校の》教員、《時に》教職員《集合的》」となっている。
- 4 有本章「大学教授職とFD：アメリカと日本」東信堂 127—128（2005）
- 5 日本におけるFD活動は、慶應義塾大学SFCが1990年に開設したものが祖と考えられる。
- 6 大学審議会答申（1998.10.26）「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm) 1—75
- 7 関正夫『日本の大学教育改革—歴史・現状・展望—』玉川大学出版部、最終章（1988）
- 8 前掲書：関正夫（1989）4—5
- 9 太田和敬「大学の授業改善に関する試論」人間科学研究29、文教大学人間科学紀要委員会 28—32（2007）
- 10 藪下武司、二神律子「Faculty Developmentによる授業改善の一例—現代GPのキャリア教育—」中部学院短期大学部研究紀要8 中部学院短期大学部 98—101（2007）

## 参考文献

- Dewey, J., 1933, *How we think : A restatement of the relation of reflective thinking to the educative process*, New York : D.C. Heath & Co.
- Shon, D.A., 1983, *Reflective practitioner : How professionals think in action*, New York: Basic Books.
- Shon, D.A., 1992, *The theory of inquiry: Dewey's legacy to education*, *Curriculum Inquiry*, 22, pp. 119—139
- Encyclopedia of Educational Research (5th ed.), Free Press, 1982
- Atlanta : Southern regional Education Board, 1976
- 有本章『大学教授職とFD：アメリカと日本』東信堂（2005）
- 太田和敬「大学の授業改善に関する試論」人間科学研究29 文教大学人間科学紀要委員会 25—33（2007）
- 海口浩芳「効果的な授業運営に求められる教育方法等の検討」  
北陸学院短期大学紀要39 北陸学院短期大学 23—33（2007）
- 川嶋太津夫「大学教員の資質の開発・向上と大学の活性化」『大学教育研究』KJHE 5号（1997）
- 川嶋太津夫「大学教員の資質の開発・向上と大学の活性化（続）」『大学教育研究』KJHE 6号（1998）
- 木野茂『大学授業改善の手引き：双方向授業への誘い』ナカニシヤ出版（2005）
- 木原俊行「教師の反省的成長に関する研究の動向と課題—他者との「対話」システムに注目して」教育方法学研究21 107—113（1995）

高田短期大学紀要第27号

佐藤学『教育方法学』岩波書店（1996）

関正夫『日本の大学教育改革－歴史・現状・展望－』玉川大学出版部（1988）

関正夫編「大学教育改革の方法に関する研究－Faculty Developmentの観点から－」広島大学大学教育研究センター（1989）

平田祐子「日本人のコミュニケーション能力向上についての一考察－日本人の特性を考慮したプレゼンテーション教育－」『同志社国文学』58 同志社国文学会 175－184（2003）

山口恒夫「『反省的实践家』の形成を目指す教師教育と教育哲学」教育哲学研究No.95 27－31（2007）

藪下武司、二神律子「Faculty Developmentによる授業改善の一例－現代GPのキャリア教育－」中部学院短期大学部研究紀要8 中部学院短期大学部 98－101（2007）

米谷淳「授業改善に関する実践的研究 5. 学生の授業評価とメディアの効果」『大学教育研究』KJHE9号 41－58（2001）